

総合俳句論

―多様な俳句への新たな展開を―

第一章 世界の俳句

1 世界の俳句

浮世絵とともに欧米に伝えられ日本の俳句は、一世紀を経た今では、それぞれの国の言葉で作られ、日本語の俳句とは違った独自の道を着実に歩みつづけている。その事情の一端を伝えるものに、アメリカ俳句協会の招きでアメリカを訪れた山本健吉氏の報告がある（毎日新聞・昭和五三・一〇・二三）。そのなかで注目すべきことは、第一には、アメリカの俳句人口である。

出で立ちの前にドナルド・キーン氏が、

「日本よりアメリカの方が、俳句人口が多いかも分かりませんね」と言った。いたずらっぽい微笑をたたえてである。

第二には、エズラ・パウンド等によるイマジズム運動との関わりである。

コール氏は「日本の俳句のふたつのイメージの併置はすばらしい」と言っているが、イマジズムの運動以来、アメリカのハイク詩の作家には、根底にそのような考えがあるようだ。

山本健吉氏がアメリカでの講演で心がけたことは、つまり、日本とアメリカとの俳句交流における山本健吉氏の姿勢であるが、それはこうである。

私は日本において、俳句とは如何なるものであるかを話せばよいので、アメリカで作られる俳句が日本の俳句の特性をそのまま継承すべきものだとは、思ってもいないのである。ただ、日本に発生した俳句という短い詩型に触れて、それが彼等の内から衝き上げてくるモチーフに、あるはけ口を与えれば、それで十分だと思ふのである。五・七・五の音節や、季の約束が、彼等のハイク詩にとって、余計なことか、必然のものかは、彼等がみずから判断すればよいことで、私は一ことの見解もはさまなかつた。

欧米の俳句は、日本の俳句の影響を受けながらも独自の発辰をつづける逗命

をたどるとみてよいであろう。

欧米に伝えられた俳句の一世紀にわたる成果の一つにアメリカ俳句協会会長
コール氏の編集による俳句アンソロジー (The Haiku Anthology, Anchor Books,
一九七四) がある。アメリカとカナダの俳句詩人三七名による英語俳句二三三
句が収録されているのである。そのなかには、私が松山で発行していた「ハイ
ク・スポットライト」(昭和四三年九月創刊)に取り上げた句もみられる。
ここに代表句を二つ紹介しておこう。

Lily:

out of the water....

Out of itself. Nicolaus Virgilio

睡蓮

水の中から

己れから

ニコラス・ヴァージリオ

Snow falling

on the empty parking-lot:

Christmas Eve... Eric Amann

雪降れる

空っぽの駐車場の

クリスマス前夜

エリック・アマン

日本の俳句は、まちがいなく世界文学への道を歩みはじめたようである。ゲ
ーテは、一八二七年一月三十一日エツカーマンにこう言っている。「国民文学は、
いま犬したことはない。世界文学の時期が来ている。この時期をはやめるため
に、だれもが、いま働かなくてはならない」と。世界文学 (Weltliteratur) と
いう言葉は、ゲーテの作りだした合成語で、それ以来ドイツの日常語となった。
東方に少なからぬ関心を抱き、アメリカ新大陸に人類の未来の夢を描いていた
ゲーテは、偏狭な愛国主義を嫌い、常にユニヴァーサルな視点に立って世界文
学を提唱したのである。ゲーテの作品は、偏狭な地方主義に墮することなく、
世界の舞台で輝くのである。ドイツ魂の代表であるファウストは、ゲーテの手
によって世界のファウストになることができた。ドイツの国民文学は、ゲーテ
によって世界文学の高みに登ることができたのである。

海外の俳句人口は爆発的に膨張し続け、日本の国民文学である俳句がゲーテ

のいう世界文学へと進み始めた。外国語のオリジナルな俳句は、フランスの医師ポール・ルイ・クーシューによって始められた。一九〇六年に来日したクーシューは、日本の俳諧をフランス人に紹介し、オリジナルなフランス語俳諧を創造した。一九二〇年は、フランス俳諧の年といわれ、ドイツの世界的な詩人リルケも、フランス語俳諧やドイツ語俳諧を作りあげている。

一方、イギリスのロンドンでも、フランス語俳諧の盛んであった一九二〇年頃に、フランス象徴詩人の影響を受けたイマジスト達がしきりに俳諧を作っていた。イマジストの組織者であるエズラ・パウンドの詩は、日本の俳句の影響を深く受けたものとして注目に値するであろう。パウンドは、メトロの詩を生んだ経緯を次のように述べている。

三年前の一九一一年、私はパリのラ・コンコルドで地下鉄を降りたとき、突然美しい顔を見た。それから一つまた一つと……そして私は一日中、それが私にどういう意味をもっていたのかを表現する言葉を見つけようとした……すると、その晩突然、私はその表し方が分かった。言葉ではなくて、色彩の小さな斑点となって現れたのである。それはまさに一つのパターンであった。だがもしも、パターンという言葉がその中に何か反復のあるようなものを意味するならば、パターンともいえない。しかし、それは一つの言葉であった。私にとっては色彩のある新しい言葉の始まりであった。

日本人は……この種の知覚の美を理解していた。日本人は……ということが発展させたのだ。

*The fallen blossom flies back to its branch:
A butterfly.*

花枝にかへると見れば胡蝶かな

これは大変よく知られた発句である……一つのイメージからなる詩は、重置法の形式、いかなれば一つの観念を別の観念の上に置くものである。私は、それが地下鉄での感動を表現できないでいる行きづまりから抜け出るのに役立つということが分かった。

私は三十行からなる詩を書いたが、それを破棄した。というのは、それがいわゆる二流の緊密さの作品であったからだ。六カ月後にはその半分の長さの詩を作った。そして一年後の一九一二年に私は次に見られる発句のような文章を作った。

The apparition of these faces in a crowd;
Petals on a wet, black bough.

群衆の中のこれらの顔の亡霊
濡れた黒い枝についた花びら。

英語のオリジナルな俳句を本格的に作り始めたのは、同じイメージストのエミイローウェルである。彼女は「二十四のホック」と題する俳句を残している。その中に次のような句がある。

Watching the iris,
The faint and fragile petals——
How am I worthy?

アイリス、そのほのかな
崩れやすき花びらを見ていと——
私の価値は？

俳句の東西交流は、第二次世界戦争によって一時中断されるが、その後の外国語俳句は、質量ともに戦前を遥かに凌ぐものとなり、その中心をフランスからアメリカに移した。それには、コロンビア大学教授であったハロルド・C・ヘンダーソンの功績が大きい。ヘンダーソンは、一九五八年に『俳句紹介』を著わし、当時のアメリカにおける俳句熟を駆り立てる契機を作った。更に一九六五年には、『英語の俳句』というオリジナルな英語俳句の指標となるべき書を刊行した。

最近の海外での俳句界の現状は、本章の冒頭でその一部を紹介したが、勢いの衰えるきざしは見せず、ますます盛んになっていくようである。このことは、精神の東西交流にとって何よりも歓迎すべきことであり、人霜の文化をますます豊かなものにするであろう。

2 ドイツの風土と季感

ドイツの国は、正しく言えばドイツ連邦共和国のことであるが、ドイツ文化を語る場合は、いわゆるドイツ語圏文化ということで、オーストリア、スイスの文化・文学をも含むと考えた方がよく、これらの国は、中央ヨーロッパにある。日本と同じ北半球に位置するが、やや北よりである。西はフランス、オラ

ンダ、南はイタリア、東はポーランド、北はデンマーク等の諸国に接している
ので、古くから国家間の紛争に巻き込まれることが多く、回廊の運命といわれ
ている。

国境の駅の両替遅日かな（独蘭国境）

高浜虚子

ドイツの国家（ライヒ）成立は、オットー大帝による神聖ローマ帝国の創設
（九六二年）まで待たねばならないが、それ以前のゲルマン民族諸部族の動向
は、ローマの史家タキトゥスの『ゲルマニア』によって知ることができる。中
央ヨーロッパに居住し、粗野であるが部族の結束が固く戦闘能力をもっていた。
この諸部族のなかに「ドイツ」という意識が発生したのは、八世紀末ごろとみ
られる。フランク王国のカール大帝の時代で、この時期にドイツ語で書かれた
ドイツ文学が興った。「ドイツ」、ドイツ語では *deutsch* というが、語源的には
「民族の」という意味で、ローマのラテン文明や他に対して自らの「民族」を
自覚し始めて生まれた言葉である。こういったところからもドイツ文化が中央
を指向するものではなく、地方に、地域に根ざしたものと見てよいであろう。
俳句の季語が江戸時代の中央集権社会によって作りあげられたものなので、季
語がドイツ語で育っていないのも、ドイツのこういった地方分権の意識による
ものと思われる。日本では、北海道と沖縄のひどく異なった自然と風土が一つ
の季語で括られてしまうが、ドイツでは、北ドイツと南ドイツの自然と風土の
違いを季語で括ってしまうことは難しい。北の北海やバルト海と南のドイツア
ルプスとを括ってしまうことはドイツ人にはできない。

キャベツとる遠くオランダの風車（ラインラント）

山口青邨

川見居るふるさと遠き秋の風（エルベ川）

川本臥風

ドイツ文学史の上で二つの頂点がある。その一つは『ニーベルンゲンの歌』で
代表される十二、十三世紀の「英雄叙事詩」であり、これは「民族叙事詩」と
もいわれ、ドイツ民族の歴史的苦闘と哀歎をうたいあげ、ドイツ民族の心の故
郷といわれている。他の一つは十八世紀から十九世紀への変わり目ごろのドイ
ツ古典主義の文学である。これはゲーテとシラーを中心にしたもので、その多
くが日本にも紹介されている。「英雄叙事詩」の時代の抒情詩として「ミン
ネ・ザング」といわれる恋愛詩があり、ワルター・フォン・デル・フォーゲル
ワイデの『菩提樹の下で』が最も有名である。春の野での愛を歌う少女のこと
ばには、春の野の風物が美しく描かれているが、これは、ゲーテの『五月の歌』
を思い起させるものがある。愛のことばと絡み合いながらも、春の野の風物が

美しく描かれている。『菩提樹の下で』では、「ナイチンゲール」が、『五月の歌』では、「雲雀」がドイツの春を象徴する風景となっている。若者の愛と自然の風物との交歓、これは詩人の自然のままの真実であって、この二大詩人がまったく同じところへと心を向けているのに驚く。ゲーテの『五月の歌』はこうである。

なんと素晴らしい

自然のひかり。

太陽は輝き

野は笑う。

花ばなは

枝より噴き

いく千の声は

茂みより湧き上がる。

ほとばしる

よろこび この歓喜。

おお地よ 太陽よ、

幸福よ 希望よ、

おお愛よ 愛よ。

黄金なすその美しさ、

峰にかかる

あの朝空の雲に似て、

おんみは晴れやかに祝福する、

生命湧く野を、

花にけふる

みちみちた世界を

おお少女よ 少女よ、

ぼくは君を愛する！

君の眼はなんと輝くことか！

君はぼくを愛する！

そのように愛する、
雲雀は歌と高みを、
朝の花ばなは
空の香りを、

そしてぼくは君を、
湧きたぎる血で。

青春と喜びと
勇気とを、

新しい歌と舞踏とを、
ぼくにあたえてくれる君！

永遠に幸福であれ
君の愛とともに。

この詩は、自然と詩人の心がうまく一体となっており、その点、ヨーロッパの抒情詩のなかでは稀な存在だといえるが、自然に対する「心の態度」をみると、やはり日本の俳人たちのそれとは違う。

雲雀より上にやすらふ峠かな

松尾芭蕉

ゲーテの「雲雀」は、愛の高まりの比喩として、空へと向かう晴れやかなものとなっているが、芭蕉の句には、現実容認の静かな観照がみられる。人間が、「雲雀」より上の高みで静かな安らぎを求めている。ヨーロッパでは、自然がうたわれるとき、向上への憧れをあらわす現実打開の象徴となっており、日本では、現実容認である自然との一体感を表すものとなっている。「現実打開」と「現実容認」とのこうした違いは、自然に対する「心の態度」の違いから生じたものとして理解してよい。ドイツは、日本と同じ北半球に位置するので、日本と同じように春夏秋冬の四季があり、ロマン派はもちろんのこと、多くのドイツ抒情詩人が四季をうたうが、ただ自然と風土のつくりだす四季折々の風景が異なり、なによりもその風景に触れる詩人の「心の態度」がドイツと日本では違う。「四季」そのものよりも「心の態度」、これがドイツ抒情詩から日本俳句を大きく隔てているところのものである。

黄楊から出る蛾のよろめきつつ　この夜息絶え、知ることもなからう
春でなかったのを。　R・M・リルケ

この詩は、ドイツの世界的な詩人リルケが作った「ハイカイ」という題のドイツ語俳句で、「心の態度」が日本の俳句の場合とはまた別であるというものの、自然と風景、それに季節を短い三行のなかで充分にうたい上げている。ドイツの自然と風土のなから生まれた詩であることに間違いはない。リルケの詩には、季節を詠んだものがかなりある。なかでも『秋の日』『秋のおわり』『秋』といった一連の詩がよく知られている。ホーフマンスタールの『早春』も近代名詩として知られ、早春の風物をういういしい感性でうたい上げる。春の季節そのものを詠んだものにメーリケの『春だ』がある。ドイツの春・秋は、日本のそれと比べると短い。夏から冬へと一気に駆け抜けてしまう短い秋、秋のすぐそこには冬がいて、長い冬には春を誰もが憧れ待つ。ドイツの四季は、日本と違って 春夏秋冬が同じ重みをもつものではない。ドイツの自然は、南がアルプスに遮られ、北に北海とバルト海が広がる。そのなかを父なるラインと母なるドナウが流れる。ドイツは森と川の国といってよい。ロマン派をはじめ多くの詩人達が美しく歌いあげてきた森であり、川である。そこには決まって季節がある。

〈春〉

アルプスの小王国の桜冷（リヒテンシュタイン）

浅野なみ

〈夏〉

川風に夏逝く中にいて吹かれ（ライン川）

脇坂公司

〈秋〉

爽やかや朝の野を鹿跳んでをり（シュワルツワルト）

岡 茂子

〈冬〉

少年のヨーデル雪に銜せり（グリンデルワルト）

赤尾恵以

「爽やか」という季語がドイツの秋を表わし得るかどうか、多くの疑問を残している。ドイツの真夏は、朝がとても涼しく、吹く風の爽やかさに日本の秋を思う。ドイツの秋は短く、季節に爽やかさを感じることはあまりない。

塔ひとつ見えて吹雪の村過ぎぬ（リニューベック付近）

坂手美保子

「吹雪」は俳句の季語であって、ドイツの冬をも遺憾なく表現し、その象徴

となり得ている。この句を得て「吹雪」という日本の季語は、ドイツの自然を象徴することができたとみてよいであろう。「塔ひとつ見えて村過ぎぬ」という風景は、紛れもなくドイツで、この言葉でもって、この句の「吹雪」は、ドイツの自然であることがわかる。「月」、「花」といった季語は、「雪」とは違ってドイツの季節を象徴するには、無理がある。「月」を秋だけに限ってしまうことも、「花」を桜の花に限ってしまうことも、ドイツではおそらく無理だと思われる。

書に耽り故国の霧の濃さ浮かぶ（ハノーファー） K・ワルツオック

松山にいて故国のハノーファーを想う句で、フランクフルトで伊予の松山を詠んだ「蜜柑剥いて香を嗅ぎ込めば伊予遠し」と対をなしている。「霧」、「蜜柑」という日本の季語がドイツでも通用するという例句である。ドイツの霧を詠んだ日本語の俳句が意外に多いが、海辺の町フーズムが詩の舞台となっているシュトルムの『町』は、季節感あふれる霧を詠んで北ドイツの自然と風土を表現する。『十月の歌』は、「霧立ちのぼって 木の葉落ちる時」の一行から始まって「霧」は、秋を強く印象づける言葉となる。

スイスは朝の青さ張り泉湧く（ツン湖畔） 有働 亨

森には泉があり、町の中心には泉の噴水があつて、ドイツを象徴する。中央ヨーロッパのスイス、オーストリアもまた同じ風景である。

カスターニエの青き実曇天よりもげば（ベルリン） 高橋正子

「カスターニエ」は俳句の季語とはなっていないが、ドイツの風景を作りだしているものの一つであり、実は、食べることの出来るものと出来ないものがある。くり、とち、あるいはマロニエといったところか。この句は、ドイツの風土に相応しい言葉を使って季節感あふれる風景を詠むことに成功した。「青き実」は、夏である。海外で俳句を詠むとき、季題、季語、季節といったところを深く再吟味することなしに安易に使用したならば、その句は、ドイツの自然と風土から遠く離れてしまう。

熟れ麦を刈り機の食める筋また筋（フランクフルト郊外） A・シユタム 高橋信之訳

この句の良さは、ありきたりの花鳥諷詠といったものではなく、季節感あふ

れる生活風景を鮮明に生き生きと表現したところにある。このことは、その原句のドイツ語を読めば、はっきりするであろう。句の冒頭に前置詞《in》を置くことによつて、空間の位置、すなわち「熟れ麦」の田園風景を鮮明に浮き上がらせ、その一行目から二行目の動詞に向かつて求心的な力が働く。さらに《s》などの歯擦音が「刈り機」の唸る田園風景を生き生きと表現する。季は晩夏であり、刈取り機や刈り取った後の筋といった情景がありありと目に浮かんでくる。これがドイツの風景であり、これがドイツの俳句であろう。言葉そのものに季節感があり、一句の全体に季節感があつて俳句となりえたのである。